

令和5年度 東京都立保谷高等学校 学校経営報告

過去3年の数値動向と今年度の数値目標及び実績

項目	令和2年度	令和3年度	令和4年度	今年度目標
教員相互の授業参観延べ回数	211回	△501回	▼382回	500回 △543回
授業満足度(学校評価アンケートより)	67.4%	△67.6%	△79.8%	80% ▼76.9%
英検準2級以上合格者数	225名	▼202名	▼101名	200名 ▼87名
夏期冬季講習受講者数(延べ)	1048名	△4515名	▼3384名	4000名 ▼3023名
生徒の1日平均学習時間(平日9月)	1年 38分 2年 57分	1年 △49分 2年 ▼48分	1年 ▼48分 2年 △53分	1年60分 ▼30分 2年90分 ▼36分
外部模試(1月実施)偏差値	1年 45.0 2年文 49.9 2年理 45.6	1年 ▼44.0 2年文 ▼46.1 2年理 ▼42.5	1年 △46.4 2年文 ▼45.9 2年理 △43.7	1年 50 △47.3 2年文 △46.1 2年理 ▼43.5
大学入試センター試験(共通テスト)英語偏差値	47.4	△49.5	△52.7	53.0 ▼47.1
現役進路決定率	92.7%	▼78.1%	△94.8%	95% ▼88.0%
4年制大学合格者数(現役)	512名	△593名	△610名	630名 ▼544名
国公立大学合格者数(現役)	1名	△2名	△4名	5名 ▼0名
私立大学(早慶上智理科)現役合格者数	2名	△6名	△7名	10名 ▼2名
私立大学(GMARCH)現役合格者数	28名	△28名	△36名	40名 ▼35名
私立大学(成成獨国武明学)現役合格者数	48名	▼45名	△57名	60名 ▼53名
私立大学(日東駒専)現役合格者数	112名	▼91名	▼83名	100名 △97名
年間遅刻延べ回数	2035回	▼2156回	▼4235回	2000回 ▼4423回
特別支援教育に関する委員会の開催回数	23回	▼22回	△28回	30回 ▼14回
統一体力テスト体力合計平均値	53.6	▼52.9	△55.9	56.0% △56.8%
部活動加入率	95.0%	▼94.0%	▼92.0%	95.0% △95.0%
学校満足度(生徒)(学校評価アンケートより)	58.6%	△59.5%	△64.2%	65.0% ▼55.1%
学校満足度(保護者)(学校評価アンケートより)	82.0%	△82.0%	▼79.6%	85.0% ▼61.3%
体育祭、文化祭来場者数	3905名	▼0名	△1739名 (文化祭のみ)	3000名 △4232名 (文化祭のみ)
学校説明会参加者数(本校実施分)	1391名	▼1388名 (人数制限実施)	△1674名 (人数制限あり)	1800名 ▼1678名
中学校進学対策委員会志願倍率	1.28倍	△1.28倍	△1.29倍	1.30倍 △1.51倍
入学選抜応募倍率(推薦・一次募集)	推薦2.67倍 前期1.41倍	推薦△2.83倍 前期△1.43倍	推薦△3.32倍 前期△1.43倍	推薦3.30倍 ▼3.16倍 前期1.50倍 △1.70倍

ホームページ更新回数	209回	△239回	△348回	350回 △772回
一般需用費のセンター 執行率	48.1%	▼45.2%	△45.8%	50.0% △49.5%

2 今年度の主な取組

(1) 学びの保障

- ア オンライン学習の活用による学習保障、HPやクラウドサービス等を活用した課題配信
- イ 放課後学習や補習・追試等を通じた基礎・基本の定着
- ウ 定期考査前の7時間目（全生徒を対象とした放課後の自学及び補習）実施
- エ 補講用の動画配信、夏季冬季休業期間における講習及び予備校サテライン講座の実施

(2) 教員の授業力向上

- ア 管理職による授業観察（2回）後の個別指導と生徒による授業評価（外部委託）の活用（1回）
- イ 大手予備校主催の教員対象セミナーへの参加（5名）
- ウ 相互授業参観（543回）

(3) 指定校事業の活用

- ア 英語教育推進校：英検等を活用した英語4技能の計画的育成
- イ 進学指導研究校：模試分析会（2回）
- ウ 海外学校間交流推進校：国際理解教育の推進

(4) 特別活動の工夫

- ア 感染症防止対策を施した上での学年行事の実施
- イ 係・委員会活動等を通じた生徒の主体性・判断力・行動力の育成
- ウ 部活動参加生徒の自発的行動力を高める指導の工夫

(5) コロナ禍明けにおける募集対策

- ア 学校の特色の明確化・可視化
- イ 生徒（部活動・生徒会・放送委員会）による学校紹介動画のホームページ掲載
- ウ 中学校及び私塾の学校説明会参加
- エ 学校見学会及び学校説明会での生徒による学校案内

(6) 感染症防止対策

- ア 毎時窓、ドアの開放、サーキュレーターを活用するなどして換気の徹底
- イ 昼食時の校内放送による注意喚起と教員の巡回

3 今年度の成果と課題

(1) 学習指導

成果：生徒の基礎・基本の確実な定着、学習習慣の確立、学力の向上を目指して取り組んだ。また、新学習指導要領に向けた教育課程の整備などを行い、指導内容の確立を図った。オンライン学習も整備し時間割に沿って全校で授業を行うことができた。こうして、生徒の学習への取組、教員の学習指導に対する取組は今年度も本校における学習活動を推進させた。昨年度に比べて今年度は、学校評価における授業満足度はほぼ横ばいだが約3ポイント減となった。教員相互の授業参観者総数は、昨年度は約100回減少したのに対して、今年度は約160回増加した。

課題：長期休業中の講習受講者数は延べ361人分減少した。一日当たりの家庭等自主的学習時間は、1年2年とも減少している。

考察：昨年度から実施された新教育課程とそれに関連した学習内容や学習方法などの大きな変更に取り組む、1人一台端末を活用した学習指導を推進した。長期休業中の講習受講者数は減少したが、感染症対策で自宅でのオンライン受講を可能としたことによる影響と考えられる。学習効果をさらに高め、卒業後の進路保障につながるよう、さらに継続して取り組んでいきたい。授業満足度は、昨年度よりやや減少したが高い数値を維持しており、コロナ禍が明けてさまざまな活動が復活する中、授業への参加意欲も高まってきている結果と考えられる。今後も引き続き学習する機会の確保に努めていきたい。

(2) 進路指導

成果：3年間のキャリア教育計画に基づき、進路指導部が学年や教科等と連携し、目標達成までのプロセスを重視したミスマッチのない指導を行った。データに基づく個別指導により生徒の第一志望の進路実現を目指して指導を行った。また、探究活動の充実により進路意識を高めた。進学指導研究校の指定を受け、進路指導部主催の校内研修を実施し、大学説明会や大手予備校他民間教育機関の実施する教員対象の研修会に参加して進路指導に対する指導力を高めた。大学合格者数は、前年度と比べて、日東駒専の合格者数は9名増となっている。

課題：難関校での合格者数が今年度は伸び悩んでおり、前年度と比べて、国公立大学合格が無く、早慶上理現役合格者数が5名減、GMARCHの合格者数が1名減、成成獨国武明学の合格者数が4名減であった。

考察：今年度も計画的な進路指導や生徒の努力により進路決定に至った例が多かった。新たな大学入試制度とコロナ対応による受験の変更等による対応は困難なことが多かったが、できる限りの適切な

情報を得て、それらを受験指導などに活かした。いっぽう、難関校への挑戦を避けて早い時期の合格を狙う傾向が進んでおり、生徒の自己理解を進めさせるとともに意欲の喚起と粘り強い努力を続けることを促していきたい。今後も綿密な進路指導を行うことにより生徒の進路実現に貢献し、来年度さらに有用な進路指導を行うことが重要である。

(3) 生活指導

成果：服装、頭髪、化粧などの身だしなみに関する禁止事項に対し、極端に違反する生徒や違反を繰り返す生徒はほぼいない。また、いじめ案件として挙げられるような事例もほぼなかった。通学時の安全指導も常に行った。主に生活指導部、学年の担任を始め教員が地道な取組を行い、生活指導の効果をあげた。

課題：自転車を中心とした通学マナーに関しては、日常の指導や朝の通学指導などで改善されてきたが安全に対する意識が低い生徒も若干いるため、大分減ってきたが近隣からの苦情の解消には至っていない。新年度の自転車通学時のヘルメット着用を徹底させることが課題である。また、一部盗難の被害が出ており、対策を進める必要がある。

考察：学校評価において、規則正しい生活習慣、自転車乗車時のルール順守と思いやりの心、相談できる人の有無、SNSの正しい使い方、家庭でのルール設定、規律ある生活、良好な人間関係を構築できているか等の問いには概ね生徒・保護者ともに肯定的回答をしている。本校が「いじめの防止を含め、安心して通える学校づくり」のためにしっかりと生活指導を行っていることが大きく影響していると思われる。引き続き、生徒に粘り強く身だしなみ指導の意義を理解させるよう努めていく。また、遅刻回数増が長期欠席者の遅刻増と重なることが多いため、個々の生徒への適切な支援も必要となる。生活指導が定着してきているので、さらに規範意識の向上などが図れるよう、次の段階の生活指導に進めていく。

(4) 健康教育

成果：統一体力テスト合計平均値はコロナ禍でしばらくできなかつた一昨年度、昨年度よりやや向上傾向にあり、目標値を超える平均値を出すことができた。健康教育と共に感染症対策を徹底した。産婦人科医を招いた特別授業も開催し、生徒の意識向上を図ることができた。また、ゴミの分別排出減に努めた。排出量は昨年度とほぼ同量であった。地域清掃活動もコロナ禍前と同様の実施をした。

課題：コロナ禍による体力の低下がまだ感じられる。忍耐力を身に付けさせるためにも、長時間粘り強く続けていく運動を取り入れるようにする。今後も感染症対応で心身共に受けた影響を回復すべく、健康教育の継続が必要である。また、美化活動の推進も必要である。

考察：コロナ禍により実技教科は多くの制限を受けたが、体力の向上を含め、心身共に健康教育を推進することができた。また今年度は、コロナ禍のため、これまであまり取り組むことのできなかつた環境保全に係る地域貢献活動を復活させることができた。この活動に対し、地域の方から励ましのお言葉もいただいた。今年度も、SDGsを意識しながらの探究活動等に力を注いだ。引き続き、感染症対策で制限された活動を取り戻し、地域と緊密な連携を図っていくことが必要である。

(5) 特別活動

成果：感染症の行動制限がなくなり、コロナ禍前の内容に戻した体育祭、4000名を超える来校者を迎えた文化祭、そして第2回となる合唱祭を行うことができた。生徒会活動もコロナ禍前の活動に取り組んでいる。

課題：各行事では、コロナ禍前の活動を知る生徒がいなくなったため、実行委員会や委員会活動などで、生徒の意識を高めながら、ゼロから時間をかけて進めることが必要となった。部活動や生徒会活動等の活躍をサポートできる体制をつくる必要がある。

考察：行動制限がなくなった中で、これまでを取り戻す活動に工夫をして取り組んだ部活動や学校(学年)行事、委員会・当番活動の成果があったと思われる。感染症対応の日常を過ごす中で、特別活動の果たす意義や役割が大きいことは改めて強く感じられた。感染症対策は引き続き進めながら、それぞれの活動のねらいが達成できるよう校内の取組体制を整備していく必要がある。

(6) 広報活動

成果：学校説明会への参加希望者は引き続き多く、参加者数は昨年度同様の数で微増となった。入選においては、中進対志願倍率は、昨年度を上回る1.51倍、推薦応募倍率は昨年度の高倍率より0.14ポイント減少したが、第一次募集応募倍率は過去5年間にはない高倍率となった。ホームページは目標数値の倍以上の回数を更新し、情報発信を進めることができた。

課題：行動制限がなくなったなか、学校説明会、学校見学で多くの参加者を集めることができたが、今後も工夫しながら、学校の取組・良さの積極的発信、地域との連携、小・中学校との交流等を行っていき、地域の要望に応じていくことが必要である。

考察：学校見学会では自由な参観とし教員の説明は行わなかつたが、質問などの要望も多く来年度に向けて形態を検討していきたい。学校説明会、学校見学では、生徒の作成による学校紹介の動画を流し、生徒目線からの学校の魅力を伝えることができた。外部の学校説明会や中学校での学校紹介などへの参加も進めた。また、部活動見学等による中学生への部活動紹介ができた。今後も、工夫を凝らした広報活動を行っていくことが必要である。

(7) 組織運営

成果：分掌・学年・委員会・PT組織と経営企画室との協働体制の構築と職責に応じた業務の遂行により、適切で有効な学校運営を遂行した。また、OJTなどによる人材育成を図った。修学旅行、探究活動及び特進クラスの運営についてPTを設置し、全校的な視点で意見を集約して改革及び提案を進めることができた。また、今年度から分掌組織を統合して校務の業務分担を見直し、組織的な学校

運営を進める体制を整えた。サービスの厳正・個人情報の適正な管理を内容とする研修は年度当初のほか、さらに2回悉皆研修として実施し、意識を高めた。学校評価の記述では、生徒、保護者からは、各教科の小テスト、グループ活動、放課後補習、チューターの活用、長期休業中の講習、テスト期間の7時間目、英検等の指導、自習室の活用、進路ガイダンス、面接指導、キャリア教育の内容、朝の通学指導、遅刻者指導、生徒相談体制の充実等が本校の取組で効果があることとして挙げられた。地域からとして昨年度から近隣小中学校の職員や保護者からの意見を伺うこととした。

課題：委員会・PT組織の改定を行ったが、さらに業務の効率化を図れる組織に改編していく必要がある。学校の方針に合わせ、各学年の運営がずれることなく実施していくことが必要である。生徒、保護者からは、学習指導、補習・補講などの要望が多く挙げられた。授業改善や組織体制の整備を図っていく必要がある。地域からは、進学実績についての関心が強くあるとの傾向が見られたが、日常の教育活動を紹介していくことの必要性を感じた。

考察：今年度も、校内各組織の順調な運営により、適切で有効な学校運営を遂行した。グランドデザインをもとに中長期的な学校のあり方を確立し、今後も常に学校組織、学校運営を検証し、組織改編も行いながら、組織運営を行っていく必要がある。英語教育推進校の施策を活かした学校運営も効果的に実施できたと思われる。今後もさらに計画的、組織的な学校運営を進めていきたい。

(8) 働き方改革

成果：本校教職員の昨年度1年間の月平均定時外在校時間は年間を通して45時間以内であった。

課題：昨年度1年間の月平均定時外在校時間が81時間以上100時間未満の者は延べ37名、100時間超は延べ18名であった。平均定時外在校時間が大幅に多い職員の変化が少なく、改善の必要がある。

考察：業務の効率化については、職員会議資料を電子化し、ペーパーレスを進めた。説明会や行事参加の申込み等も電子化を進めて、業務負担の軽減を図った。今後、特定の教職員に負担が集中しないよう、担当業務の内容を精査し、校務分担の均一化を図っていく。各部署の業務の見直しを進め、効率化を図れるようにしていく。また、個人作成のデータや資料を全体のフォルダに格納して共有することで、業務の省力化を図った。長時間労働の解消と適切な健康管理については、「個人別在校時間管理表」をもとに、産業医と連携して、業務縮減や心身の健康維持に対する具体策について指導・助言し、在校時間の多い教員の減少を進めたい。また、来年度から土曜授業を見直して平日2日間の7時間授業とすることとし、平日と土日のメリハリをつけた働き方改革を進めることとした。定時外在校時間の長い教職員は部活動指導に熱心な者が多いが、文部科学省の部活動ガイドラインを遵守しながら、働き方改革を進めていきたい。